

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督：ブルース・ベレスフォード
原作：リー・ツンシン『小さな村の
小さなダンサー』（訳：井上
実）（徳間文庫刊）
出演：ツァオ・チー／グオ・チャン
ウ／ホアン・ウェンビン／ブ
ルース・グリーンウッド／ア
マンガ・シュル／カイル・マ
クララン／ジョアン・チェ
ン／ワン・シュアンバオ／エ
イデン・ヤング／マドレー
ヌ・イースト

小さな村の小さなダンサー

2009年・オーストラリア映画
配給／ヘキサゴン
117分

2010（平成22）年9月5日鑑賞

シネ・リーブル梅田

👁️👁️ みどころ

時代は1970年代はじめ。文化大革命とバレエ。江青女史とバレエ。そんな意外な組み合わせの中から、主人公ツンシンの波乱の人生が！これはすべて実話。なるほど、映画から学べることは実に多い！

バレエシーンのすばらしさはピカイチだが、色恋沙汰(?)からだけの亡命劇は、やはり若気の至り？私はそう思わざるをえない。そのマイナスのため、本作はあえて星4つに・・・。

映画から学ぶ なるほど、こんな実話が！

映画ネタでの講演が最近少しずつ増えている私が、いつも語るキーワードは「映画から学ぶ」ということ。自分の人生で直接体験できることは所詮限られているが、映画ならありとあらゆる体験をすることが可能だから、そこから学べることは大きい。そのいい例が本作。この映画を観なければ、中国からアメリカに亡命したバレエダンサー、リー・ツンシンという男がいたこと、本作は彼が自らの体験を綴った原作『小さな村の小さなダンサー』を映画化したものだということを知るチャンスはなかったはずだ。

山東省の青島に近い小さな村に住み、学校に通う11歳の少年ツンシン（ホアン・ウェンビン）が、なぜ1972年から北京の北京舞蹈学院に入学することに？、北京時代の18歳のツンシン（グオ・チャンウ）が、なぜ1979年に北京を訪れたヒューストン・バレエ団の芸術監督のベン・ステューブソン（ブルース・グリーンウッド）の目に留まり、ヒューストン・バレエ団に招かれることに？、そして本作のクライマックスとして描かれる、1981年、20歳の青年時代のツンシン（ツァオ・チー）がなぜエリザベス（アマ

ンダ・シュル)と結婚してアメリカに亡命することに?本作を観なければ、そんな波瀾万丈のツンシンの生きざまに触れることはなかったはずだ。なるほど、こんな実話が! 2時間弱でそんな勉強ができるのだから、ホントに映画はすばらしい!

『紅色娘子軍』の出来に感激!

毛沢東の提唱によって爆発的に広がり、結果的に中国を10年間大混乱に陥れた文化大革命は、1966年に始まり1977年に終焉を迎えた。毛沢東の妻・江青が女優であったこと、そして北京舞蹈学院の名誉校長をつとめていたことはよく知られているが、石子順氏の『中国映画の明星 女優篇』(2003年・平凡社)は、中国映画の明星・于藍(ユイラン)が江青の策動によって夫・田方の命を奪われたばかりか、女優生命まで断たれるに至った悲劇を詳細に描写している(11~102頁参照)。ちなみに、田方は張藝謀(チャン・イーモウ) 陳凱歌(チェン・カイコー)らと並ぶ中国第5世代監督・田壮壮(ティエン・チュアンチュアン)の父親であり、于藍はその母親だ。

江青「女史」の顔は当時ニュースなどで何度も観たことがあるが、舞台の最前列で古典バレエ『ジゼル』を観て、「踊りはいい。でも銃はどこ? 革命の描写はどこ?」と追及する本作の姿を見ていると、『中国映画の明星 女優篇』の本で書かれている江青の動きが目に浮かぶようだ。ちなみに、日中戦争時代の中国ではさかんに反日映画がつくられ、また文化大革命の時代の中国では江青らの提唱によって革命的映画や演劇がたくさんつくられたが、その代表の1つが『紅色娘子軍』。そんな「革命思想ありきの演劇なんて・・・」と思っていたが、本作で観たバレエ『紅色娘子軍』の出来はすばらしい。これなら、バレエ鑑賞後「毛首席、万歳!」と叫びたくなるのも当然・・・?

「この亡命」は、ちと早計!

本作で描かれるたくさんのバレエのシーンはどれもすばらしく、それを鑑賞するだけでも本作の値打ちは十分。またその時代背景もきちんと投影されているから、中国とアメリカとの対比の中で、ツンシンがいかに戸惑い、そして亡命を苦悩したかが描かれる。しかし、冒頭アメリカの空港に降り立った青年時代のツンシンを演ずるツァオ・チーはあくまでバレエダンサーであって、所詮俳優ではない。したがって、それなりの表現力で演技をしていることはたしかだが、好きになった女性・エリザベスと結婚すれば中国に帰らなくてもいいという、チャールズ・フォスター弁護士(カイル・マクラクラン)のアドバイスに従って、結婚=亡命を決意する本作のクライマックスは少し説得力が弱い。ベンが言うように、ここは研修期限切れ=帰国命令を率直に受け入れ、次の渡米のチャンスを待つのが大人の判断というものだ。

ところが、20歳のツンシンにとってはエリザベスがすべてだったようで、マスコミ注視の中「米中対立」を招きかねない亡命劇を演じたのは、私の目にはやはり若気の至りと

しか見えない。フォスター弁護士はこの事件によって亡命や国際私法の大家になったらしいが、彼だってここはやはり冷静にツンシンを論ずべきでは？そしてそれは、エリザベスも同じ。いくらツンシンが好きだからといって、亡命後のツンシンとホントにうまくやっていけるのかどうか十分に考えなければダメなのでは？バレエの能力自体もエリザベスはイマイチだったようだし、ケンカが続いて1年後に離婚してしまう2人の姿を見ていると、結局エリザベスはツンシンの才能の邪魔をただけでは？

ツンシンの両親が反革命分子と弾劾され銃殺されてしまうシーンは、ツンシンの夢の中だけだったから良かったものの、それは文化大革命後、鄧小平が改革開放政策を打ち出し、1979年の米中国交正常化、1984年のレーガン大統領の訪中など、中国をとりまく国際情勢がたまたまいい方向に転換したおかげ。文化大革命の路線がなお続いていけば、ツンシンが夜中に見てうなされた夢は、まちがいなく現実になっていたはずだ。

結婚はやっぱり釣り合いが大切！

バレエ団にソリストはたくさんいても、プリンシパルはバレエ団に男女各1人ずつ。そんな風に考えると、本作におけるエリザベスは、まずバレエの能力においてツンシンとはバランスを失っていることはつき合い始めた当初から明らか。したがって、一緒にカンフー映画を観たり、ディスコに行って遊ぶ分にはいいが、一生の伴侶としてはいかになもの？そう考えれば、やはり男のプリンシパルと女のプリンシパルはいつも一緒に最高の芸を見せているのだから、互いに心が通い合うのは当然。したがって、一生の伴侶としては、どちらかというとその方がベターだし、自然なのでは？

そう考えると、エリザベスとの結婚生活を約1年で終えたツンシンが、5年後に26歳でメアリー・マッケンドゥリー（カミラ・ヴァーゴティス）と結婚したのは自然の成り行きだろう。映画はその翌年、帰国を許されたツンシンとメアリーが故郷に戻り、家族や友人たちの目の前で踊りを見せるシーンで終わるが、難しいのは、なぜその後彼は中国に戻らずオーストラリアに居住したのかということ。私としては、本作でそこらあたりもしっかり説明してほしかったが・・・。

多少非人間的でも、やっぱり競争が大切！

経済成長が続き、都市部を中心に大金持ちが輩出する中、一人っ子政策が続いている中国では、「小皇帝」と呼ばれる一人っ子の「これから」が大問題になるはずだ。小さい時からベントで送り迎えしてもらうのが当然の彼ら彼女らは、たしかに詰め込まれた知識はすごいが、人間との対応能力に欠けるとともに、その肉体能力、体力面に決定的な欠陥があるのでは？最近そんな話を真剣に聞かされた私には、本作で描かれる1972～79年当時の北京舞蹈学院におけるスパルタ教育ぶりが興味深い。中国語では「頑張れ！」のことを「加油！」と言うが、周りから「加油」と言われなくても、頑張らなければ生き残って

いけないことを何よりも本人が承知していることは本作を観ているとよくわかる。08年7月27日に観た『小さな赤い花』(06年)での幼稚園におけるスパルタ教育と同じように、本作に見る北京舞蹈学院での教育が非人間的なものであることは明らかだが、トップアスリートとしてのバレエ軍団を育てるためには、これくらいの競争は不可欠?

他方、本作ではアメリカに亡命したことを糾弾するべく家に押しかけてきた人たちに対して、母親(ジョアン・チェン)が言い返す言葉が印象的。それは、「国や政府が自分の子供を取り上げておいて、今さら何を言うか!」「そんなことを言うのなら、私の子供を今すぐ返せ!」という心の叫びだ。村からたった1人選抜されたことはたしかに誇らしいことだが、それは政府の決定に従っただけのこと。その後は父親(ワン・シュアンバオ)も母親も息子の教育や進路に何ひとつ口出しできないのだから、亡命したことを批判されてもお門違いというものだ。しかし、文化大革命はもともとそんな理屈の通じない大衆運動になってしまったのだから、時代が変わっていなければ本作が描くような父母とツンシンとの感動的なアメリカでの再会はなかったはずだ。ツンシンがアメリカに亡命した後、ヒューストン・バレエ団のプリンシパルになれたのも、ひとえに孤独に耐えながら練習に励んだ頑張りのおかげ。現在のようなヤワな小皇帝では、とてもこんな頑張りはできないのでは?そう考えると、多少非人間的でも、やっぱり競争が大切!

2010(平成22)年9月6日記

尖閣ビデオの公開を!

1)1931年9月18日は関東軍が奉天郊外で柳条湖事件を引き起こした日。中国にとってこの9・18は屈辱の日帝侵略の日だ。それは、00年8月に私が訪れた瀋陽にある「9・18記念館」を見学すればよくわかる。他方、2010年9月24日は、海上保安庁の巡視船に衝突した中国漁船の船長を那覇地検の判断で(?)釈放した日。私はこれを日本にとっての屈辱の日9・24と考えているが、この衝突事故発生以降日中関係はかなり微妙(陰悪?)になってきた。私は日中友好を期待しそのための努力をあれこれ続けているが、この衝突事件については弁護士目からも、しっかり

事実を確認したいと考えている。

2)そのためには、衝突の様子を撮影したビデオ映像を見るのが一番だ。大阪地検特捜部の前田検事による押収資料改ざん事件以降、取調べの可視化の議論が強まっているが、なぜ衝突の様子を撮影したビデオがあるのにそれが公開されないの?国益を守ること。それは国と国民にとって最も大切なことだが、それに関心を持つ国民は当然このビデオに関心を持っている。ましてや、国益や外交に責任を持つべき国会議員や政府関係者が尖閣ビデオに関心を持つのは当然だ。1日も早くその公開を望みたい。

2010(平成22)年10月30日記